〈研究ノート〉

子どもたちへの東日本大震災の非直接的影響：保育所における子どもたちの発達アセスメントツール開発に向けて

大　橋　良　枝

抄　　録

東日本大震災発災から10年が経過したが，対応すべきメンタルヘルスの課題は今なお山積している。特に，超長期的段階に入り，とりわけ震災の影響が甚大であった沿岸部に直接被災経験のない子どもたちの中に落ち着かない攻撃的な様子を示す幼児が増加しているが，トラウマを抱えた環境，発達特性，愛着のそれぞれの要因を相互作用的にとらえたアセスメントツールの開発が喫緊の課題となっている。本研究では愛着要因に焦点を当てた，落ち着かない攻撃的な幼児へのかかわりに顕著な困り感を抱える被災地保育現場において利用可能なアセスメントツールの開発に向けての理論構成を，アタッチメント相互作用プロセス（工藤，2020）を基盤として検討した。

キーワード：東日本大震災，愛着の課題，アセスメントツール，アタッチメント相互作用プロセス

問題

東日本大震災から10年が経過した。東北地方の多くの地域は今や日常を取り戻したかに見えるが，この未曽有の震災の影響は今なお地域コミュニティにおいて影を残し続けており，住民たちの心理学的生活に大きな影響を与えている。

本間（2014）によれば，発災から1年を過ぎた頃から災害後の回復ステージは後期に入り，コミュニティの機能不全の影響が子どもたちのメンタルヘルスに影響を与える時期になる。また八木（2021）によれば，この時期から子どもの問題の現れが，震災の影響なのか，災害と関係なく浮上した発達や愛着の問題なのか，見分けがつきにくくなることが指摘されている。つまり，保護者の精神症状，不適切な養育や虐待，離婚や機能不全家族など，親の病理や生活上の問題に巻き込まれ，複雑な症状を呈する子どもたちが見られるようになると考えられるのである。そして，問題や症状そのものや，それらの背景が複雑化するがゆえに，行動上の問題を呈する子どもたちが容易に発達障害と疑われるようなことすらあると言う（八木，2021）。

心理福祉学部・心理福祉学科　論文受理日 2021年7月9日

すでに 10 年経った今,「超長期」的段階に入っているのだが，今なお先述の回復ステージ後期に対応すべき課題は残ったままであり（八木，2021），現状においては被災した子どもたちの複雑化した心理学的な問題を,「発達特性」の問題か,「愛着」の問題か,「トラウマ」の問題か「見分ける」のでなく，それぞれ相互に影響しているものととらえ,「見立てる」ことが重要であると指摘されている（図 1-1）。

一方，こういった被災地でのこころの支援の多くは，10 年前に直接被災した大人や子どもたちを対象として考えられていることが多いが，直接被災経験のない子どもたちの中にも被災と無関係ではないと推測される影響が出ている。柴田ら（2019；2020）は，10 年前には産まれていなかった直接被災経験のない子どもたちの中に，落ち着きのない攻撃的な乳幼児・児童が増加していることを調査から明らかにした。これによれば，東北地方の保育所の保育士や学童の指導員への調査から，特に被害の甚大であった沿岸部の乳幼児において，乳幼児の落ち着きのなさの課題が目立ってきているというのである。そして，このような落ち着きのなさは愛着の形成不全による要因が大きいと考察された。また，足立（2020）は，昨今東北地方で増加している落ち着かない暴力的な子どもたちの家族背景に,「震災後，親が失業した」「震災後，親がアルコール依存症になった」「DV や虐待が疑われる」などの葛藤の多い家族状況が散見することを示し，これらの落ち着かない子どもたちは葛藤の多い家族状況の中で愛着の発達に歪みを抱えるに至っているのではないかと考察した。こうして見たときに, 図 1-1 に示されたトラウマについては, トラウマを抱えたコミュニティ，トラウマを残した養育者や年長者たちといったように，新たに生まれた子どもたちにとっての「環境」の一部となって影響を与えていると言えそうである。そして，それは被災地の直接被害を受けていない子どもたちの問題行動をアセスメントする上で重要な背景・環境となっており，その上で

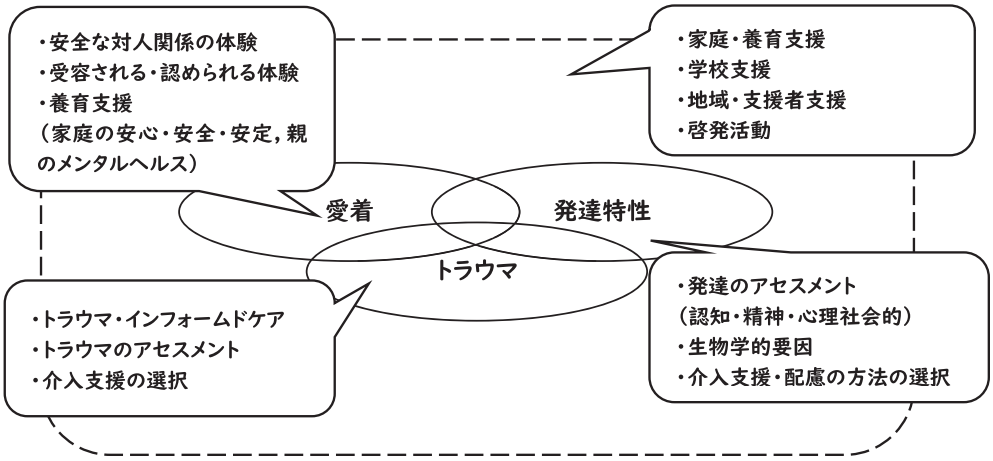

図 1-1：困難な状況にある子どもへの包括的・多角的な支援：見分けるから見立てるへ
（八木，2021，p. 78 より一部改変・省略して抜粋）

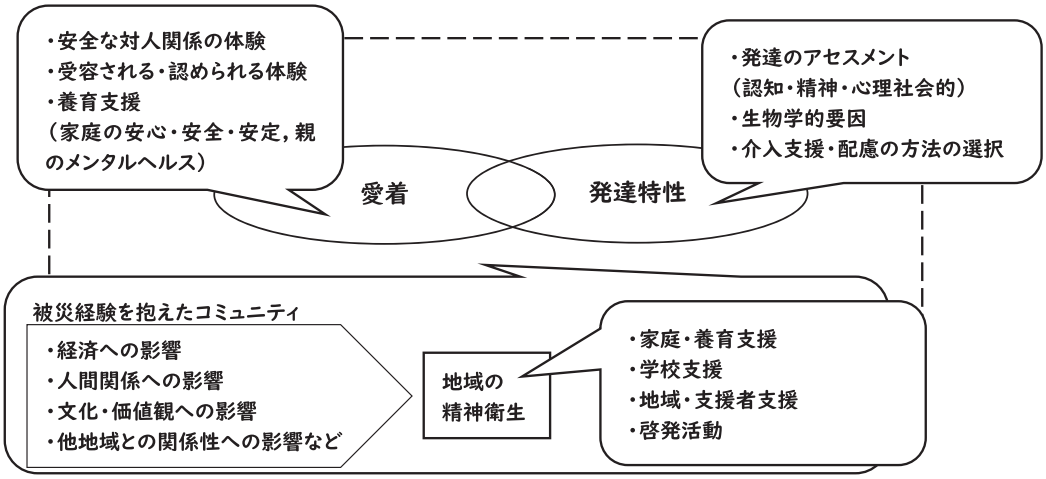

図 1–2：震災後に生まれた被災地の子どもたちへの包括的・多角的な支援イメージ

「発達特性」と「愛着」の問題を査定することが重要だと考えられそうである（図 1–2）。

実際，足立ら（2021）が指摘するように，保育園などの施設において使用できる幼児の発達アセスメントと，幼児の保育士に対する愛着行動に基づいた両者の相互作用をアセスメントするツールを開発することは，落ち着きのない暴力的な乳幼児の増加に混乱をきたしている現地の保育所にとって喫緊の課題である。Nelson（2007）は，愛着の問題を抱えていると想定される施設児に認知機能や知能（IQ および DQ）の低下が見られ，彼らに適切な養育が施されるとそれらが回復することを示している一方，Ijzendoorn らは（1995）メタ分析を通して，リスクのそれほど高くない児の場合，愛着の質の違いは知能の違いと有意に混同されることはないものの，安全な子どもは不安な子どもに比べて言語領域での能力が高いことを述べている。認知機能と愛着の問題はこれまでも指摘されてきたことであるが，支援上，「愛着」形成の様態と，「発達特性」つまり身体，認知機能のアセスメント双方をとらえ，それらの力動的な相互作用について検討することが，幼児や保育者の支援により良い結果をもたらすことを，柴田（私信）は現地での継続的な保育現場支援を通して実感しており，これは先に示した八木（2021）の示した，見分けるのではなく，見立てて，支援する，の考え方によく一致したものと理解できる。現状，運動機能や認知機能の発達とその障害に関する理論は相当に整理されており，柴田は現場で MEPA-R（Movement Education and Therapy Program Assessment-Revised；小林，2006）を使用し，その有用性を実感している一方，日々の保育室でのかかわりの中で，子どもの愛着の課題が変化発達することを評価できるような縦断的ツールを必要としており，現状そのような評価尺度が見つかっていないと言う。

そこで本研究ノートでは，大規模震災の被災から 10 年経った地の保育所等で，落ち着きのない暴力的な乳幼児とのかかわりに対して顕著な困り感を持つ現場で使用できるような，愛着上の課題を抱える子どもの変化成長プロセスを縦断的に評価し得るチェックリストの作成の基盤となる理論

の探索を行う。なお，愛着，アタッチメントという用語の区別には様々な議論が行われているが，本論ではその詳細には立ち入らず，概ね同義の用語として取り扱う立場をとる。

理論検討

1　愛着発達プロセスと，その阻害要因

愛着とは，「とりわけストレス状況の下では，特別な対象を追い求め，きわめて接近／維持しようとする傾向が特徴的な情愛的な絆」（Bowlby, 1970）を意味する用語である。そしてこれは，乳幼児期の母子関係において共同的で随伴的コミュニケーション，すなわち安心感を求めて接近する乳児の言語的／非言語的メッセージを正確に読み取り，よく調和した応答を行う相互のやり取り（Ainsworth, et al., 1978）を通して形成される。しかし，それに何らかの理由で失敗すると，乳幼児は，養育者から安心感を得る方略を諦め，他の方略を生み出さなくてはならない。

工藤（2020）はこれらのプロセスをアタッチメント相互作用としてまとめた。図 2–1 が安定した愛着が形成されていくプロセス，図 2–2 が精神衛生上の問題へと発展していくプロセスである。本研究の目的である，愛着上の課題を抱える子どもの変化成長プロセスを縦断的に評価し得るチェックリストの作成の基盤となる理論検討を行う上で，この愛着形成プロセスを説明し得る図を基に論を進めたいと思う。よって以下，この図について簡単に説明を進めていきたい。

まず，ここに示されている，「アタッチメントシステム」とは，上記のストレス状況で接近／維持しようとする行動を制御する，また，その接近／維持の対象，すなわち愛着対象（多くの場合養育者）の選択を行う，ヒトに組み込まれた「生物学的な行動システム」を指す。つまり，乳児の体験する恐怖事態，すなわち，空腹や不快などの生体の状態／騒音などの外界の条件／愛着対象の不在や無反応といった利用可能性の問題が，生物学的な危機に備えてアタッチメントシステムを活性化し，子どもの心的苦痛の表現やアタッチメント行動（近寄る，呼ぶ，くっついて離れない）を促進するのだが，それをサインとしてアタッチメント対象からの「敏感な応答」，すなわち，苦痛を認識し，理解し，適切に行動するというかかわりが得られれば，乳児は安心感を取り戻し，乳児の自立的な探索活動につながっていくというプロセスが健全な相互作用プロセスと言える。

このように見たとき，愛着発達上の課題が表れるというのは，愛着対象との相互作用，とりわけ敏感な応答性が得られず，アタッチメントシステムにおける防衛的反応や病理が常態化することを示しているのであって，アタッチメントシステムが存在しないということを示すのではない。また，図 2–2 に示されるように，養育者が敏感性に欠けた対応を行ったとしても，それは即行動上の問題や精神病理として現れるのではない。養育者が敏感性に欠けた対応を行うことに何らかの理由で失敗すると乳幼児は，養育者から安心感を得る方略を諦め，他の方略を生み出す。その方略とは，例えば，ストレス状況下において感情を鈍くさせる，つまり情動制御の下方修正を行うようなパター

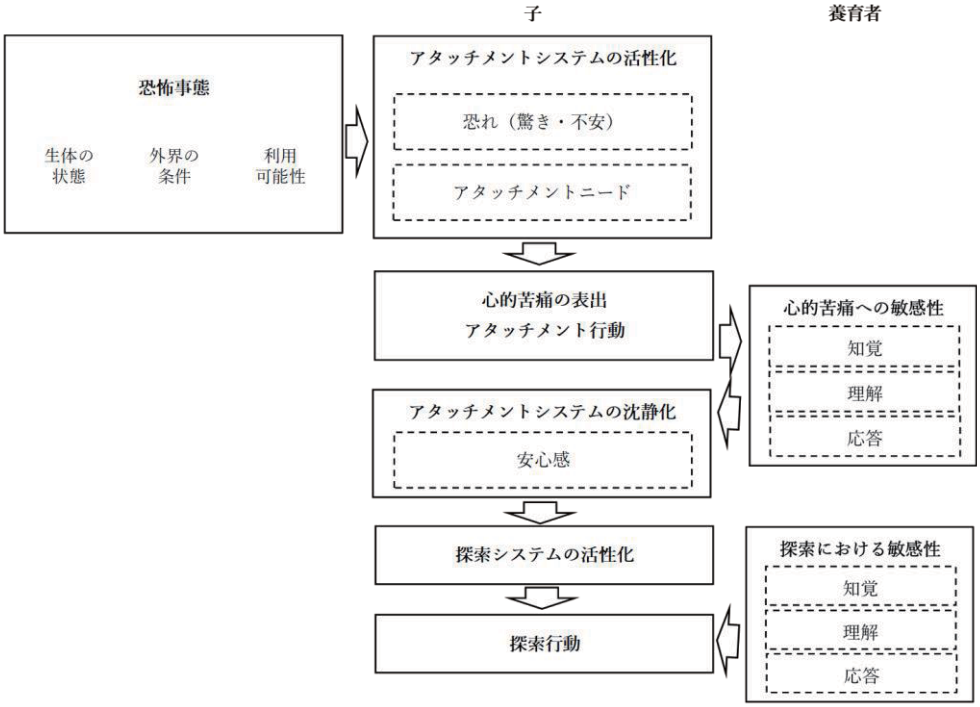

図 2–1：アタッチメント相互作用（工藤，2020，p. 30，58 をまとめたもの）

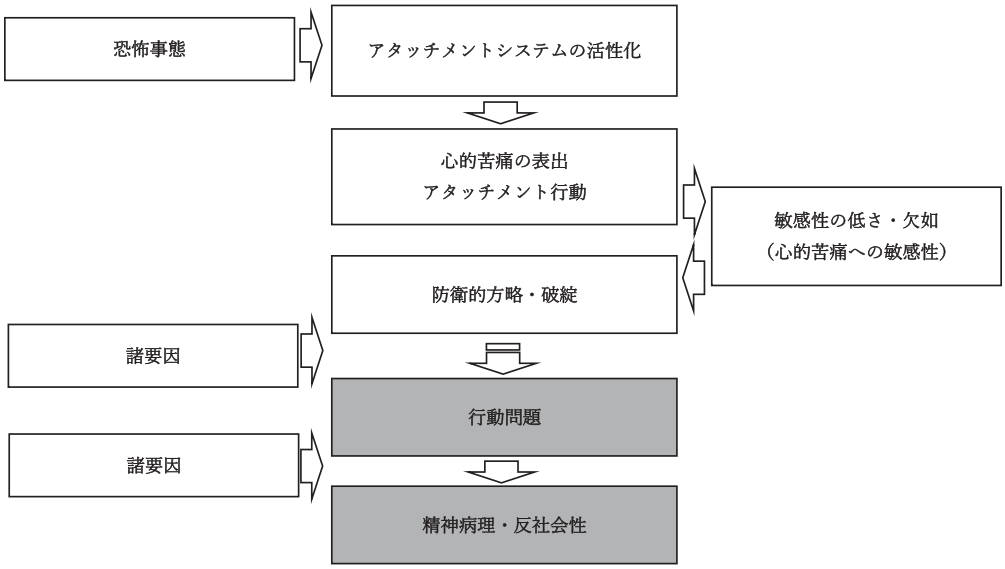

図 2–2：アタッチメントと精神衛生上の問題（工藤，2020，p. 61）

ンや，養育者など頼り得る環境を引き付けるために恐怖心をより敏感に感じて行動化するようになる情動制御の上方修正を行うようなパターンであり，前者のパターンを身につけた群は回避型，後者を獲得した群は両価型と呼ばれる群へと発達していく。

乳幼児の精神衛生という側面で言えば，図 2–1 に示されたように安定したアタッチメント相互作用を繰り返し体験することを経て，愛着の質が安定したものとなれば，その子どもはリスク要因がある状況であっても，安定した愛着が子どもにとって精神衛生上の保護因子となる（工藤，2020, p 43）。一方，養育者の敏感性に欠けた対応から形成されていく不安定な愛着型としての回避型や両価型愛着パターンと何らかの精神疾患の関連性は研究上見出せていない（Karen, 1994）。

精神疾患と愛着の関連が指摘されていったのは，後の研究で安定型，回避型，両価型の，3 つの型以外の型として示された, 無秩序型（disorganized）の同定以降である。これは, 前者 3 つの型が, 組織化された愛着と呼ばれるのに対して，非組織化された愛着と呼ばれ，質的に区別されるものである。特に，組織化された愛着が直接に精神疾患との関連性を示していないのに対し，無秩序型は後の行為障害や境界性パーソナリティ障害などの精神病理を密接に結びつくことが示されている（Fonagy et al., 2002）。この無秩序型は全体の 15％の乳幼児に見られるとされ（van IJzendoorn et al, 1999）, この数字の高さに対し Hesse と Main（Hesse & Main, 1999）は愛着の型の無秩序化が, 乳児の虐待という直接的なトラウマ的経験の結果としてだけでなく，親自身のトラウマ体験に関連する親の怯え／怯えさせる「些細な」行動に起因した，いわゆるトラウマの世代間伝達によっても起きることを示した。その些細な行動とは, Hesse と Main によれば, 例えば, 急にぼうっとしたり, 一点だけを凝視したり，乳児に性的なニュアンスを持って愛撫したり，声のトーンが上擦ったり, そのような, それを発した養育者本人も, 周囲も見逃してしまうような（けれども, 違和感のある）反応であり，それは，恐怖事態に際して安全の避難場所（a haven of security）を求めて逃げ込んだ子どもが，避難場所そのものに突然脅かされるような体験を引き起こす反応である。

それでは，以下，図 2 の工藤の示したアタッチメント相互作用のプロセス図に従って，愛着上の課題を抱える子どもの変化成長プロセスを縦断的に評価し得るチェックリストの作成の基盤となる理論検討を進めていこう。

2　恐怖事態

Ainsworth ら（1978）のストレンジ・シチュエーション法が構造的に,「養育者の不在」という不安な場面に子どもを置くことを通して，その愛着スタイルを査定しているのはよく知られたことである。図 2 では「恐怖事態」と説明されているが，このストレス状況を乗り切るためにアタッチメントシステムが活性化するのであり，また，この不安状況におけるアタッチメントシステムの引き起こす反応パターンが，いわゆる愛着スタイルということになる。すなわち，愛着スタイルを測定する状況は，この恐怖事態を何らかの形で体験することと密接に関連がある。

さて，この恐怖事態であるが，例えば，私たちにとってはそれほど私たちを脅かすものではない「空腹」などの日々の生理現象も乳児にとっては恐怖事態である（大橋, 2019, pp. 90–94）。一方で，この恐怖事態は図１にも示されている，「発達特性」とも密接にかかわっている。例えば聴覚に障害がある子どもであれば，後ろから人が急に視界に入ってくるということも恐怖事態であるというように，発達特性のありようによってその世界をどう体験し，何を恐怖と感じているかは当然違っている。そして，そのような「この子はどう世界を体験しているのだろうか。」といったまなざしがなければ，おそらく養育者や周囲の大人がその子どもに心的苦痛の敏感性を向けるのは困難である。こういった点から，子どもの愛着の発達プロセスをアセスメントしていく上で，発達特性と恐怖事態の体験の相互作用は重要な視点の一つとなるものと考える。

3　アタッチメントシステムの活性化

さて，愛着スタイルをアセスメントすると言ったときに，アセスメントされているのは，このアタッチメントシステムとそれに基づいたアタッチメント行動ということになるかと思われるが，もう一点，この段階において重要であると思われる理論を一つ加えておきたい。それは，Fonagy ら（2010, p68）が説明する二重覚醒システム（図 3）である。これは, 恐怖事態を体験すると緊張（覚醒度）が高まり，前頭前皮質のパフォーマンスは上がるが，一定以上の緊張場面になるとより本能的な防衛反応，例えば「闘争・逃走反応」を司る後頭葉・皮質下領域が活性化することを示した図である。

本論でこの図を示したのは, 乳児期の愛着発達プロセスというより, その後の人生におけるアタッチメントシステムの不全と問題行動（思考）の関係と，さらに後述する養育者と子どもの相互作用における養育者側の要因を説明するのに有効であると思われたためである。この図の示すところは,

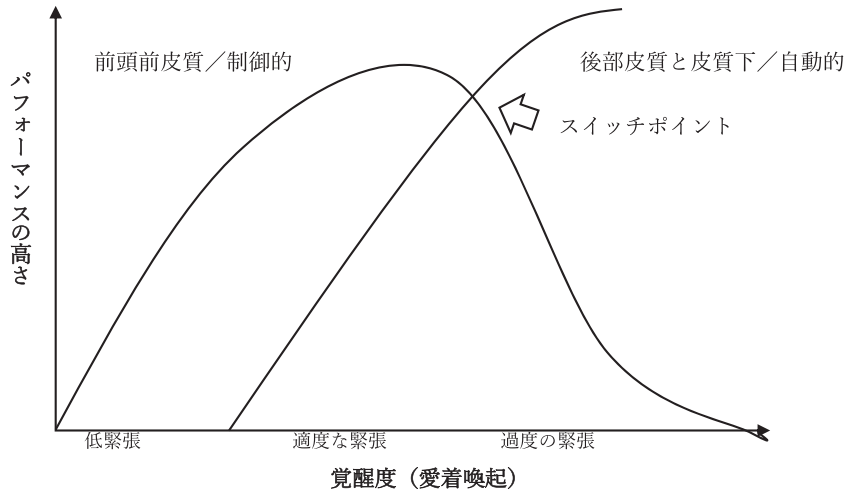

図 3：二重覚醒システム

以下の通りである。すなわち，アタッチメントシステムが強烈に活性化され，覚醒度が過剰になると，内省（あるいはメンタライゼーション）によって制御される認知的に複雑な前頭葉誘導プロセスから，自動的で，外的刺激に集中する，感情的に激しい後頭葉および皮質下駆動プロセスに切り替わるのだが，外傷体験や不適切な養育体験を重ねた場合，このスイッチポイントがより低い緊張状態のポイントで起きるようになる。すなわち，図 2–2 に示された問題行動の源となる，自動的／反射的な闘争逃走反応が容易に起きやすくなるのである。

このように見ていくと，アタッチメントシステムの活性化が即時的に行動問題に結びつくようなケースの場合，この反射的に起きるプロセスのうちに内省の空間を形成していくことが一つの介入上の方針となることが理解されるだろう。

4　養育者との相互作用：アセスメントの文脈

さて，子どものアタッチメントシステムによる安全感維持の循環の在り方，あるいはアタッチメントスタイルを形成していく上で重要な要因であると指摘された，養育者の「心的苦痛への敏感性」であるが，この点については養育者と子どもの相互作用と養育者の側の要因という 2 つの視点から見ていきたいと思う。

養育者と子どもの相互作用

子どもの心的苦痛への敏感性を維持し続けるための援助をいかに実現するか，その援助の鍵となる要素は何かについて検討した大橋（2019；EMADIS，図 4）は，その理論モデル構築上の中心概念として，投影性同一化理論（Bion, 1957）を用いた。この理論は，乳児と母親の相互作用を描いたモデルであり，図 2 にも示された子どもの恐怖・不快感情と，それを解消し子どもに安心感を与える母子相互作用プロセスを描いていたものである。また，特に子どもの恐怖・不快感情を受け取

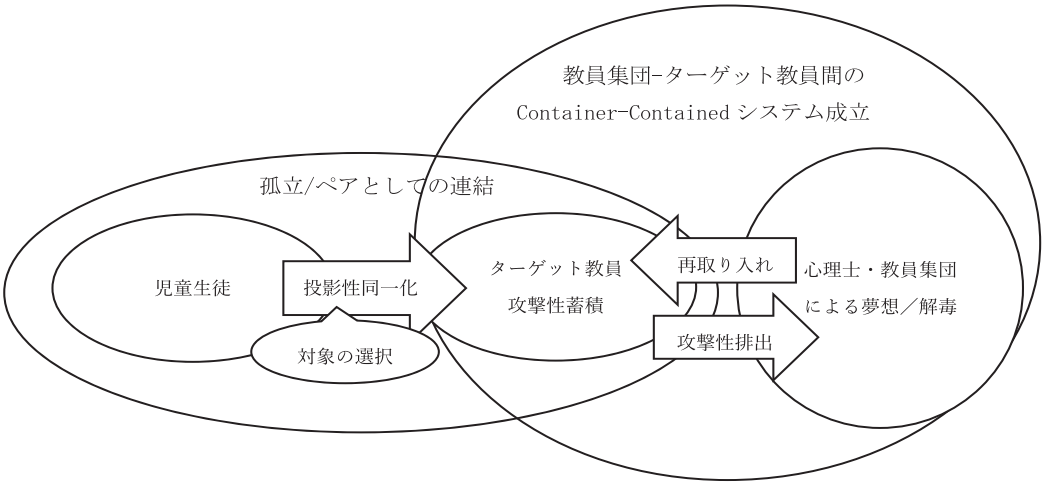

図 4：Educational Model for Attachment Disorders（大橋，2017）

る母親の心理学的プロセスとそのプロセスの阻害要因についての示唆を含む理論であるため，介入理論モデルを組み立てる上で有効であるとし，大橋はこれを採用した。足立ら（2021）は事例検討を用いて，このモデルが保育現場での，子どもの愛着発達様態のアセスメントに有効ではないかと示唆している。なぜなら，本モデルが保育者と子どもという二者の相互作用を文脈としてそのプロセスを理解する鋳型となり得るからである。

さて，投影性同一化理論に描かれる母子相互作用とは以下のようなものである。すなわち，乳児は感覚印象を解読する手段（α機能）がないために，投影性同一化を通してその感覚印象（β要素）を母親の中に排出する。このとき，乳児は自分の中から取り除きたい「死の恐怖」を母親の中に引き起こす。そして母親は，「愛する対象に由来するどんな「対象」をも自由に受け取る心の状態であり，だから乳児が良く感じていても悪く感じていてもそれの投影同一化を受け入れることができる（Bion, 1970）」夢想という，β要素をそのまま心的空間に漂わせ置いておく状態を維持し，乳児の感覚印象を解読し，乳児の恐怖感情を再取り入れしやすいように処理し，乳児に戻してやる。

これをより平易な言葉でまとめると，投影性同一化とは，不安等を抱え表現する力の脆弱な乳幼児が非言語的コミュニケーション（泣く，抱きつくなど）を用いて，それを受け取る養育者に不安・恐れ・怒りなどの不快感を喚起することと，養育者が喚起された自らの不快感を手掛かりに子どもに不安等が生起していることに気づき，子どもの訴えを読み取り，子どもの不安を処理するよう反応する相互作用を描く概念である。

大橋（2019）は投影性同一化理論に基づき，子どもの病理的投影性同一化を受け取って強烈な不快感に堪えられなくなり，子どもの問題行動の対応に失敗した教師などの社会的親に対し，彼らが不快感に堪えられるようになるための支援を検討し，それが子どもの安定した愛着システムの発達につながることを示した。その中で，投影性同一化理論の有効性について大橋（2019）は，特に，「不快感」と「夢想」に着目する。「その受け手が迫害的な感情や，強い不快感を刺激されるという特徴によって認識される」β要素は，それを受け取る母親対象の，迫害的な感情や不快感を刺激するのだが，その感覚を母親対象が子どものβ要素の処理あるいは子どもの抱えている不快・不安・恐怖の理解のために用いることができず，時として，母親対象の不快感に耐える力を越えてしまうことがある。そうすると，母親対象の夢想状態（夢想空間）は壊れ，子どもへα機能によって処理したものを返していくこともできず，子どもはそこから安全感を得ることができなくなる。場合によっては，母親は不快感ゆえに子どもに対して攻撃的に振舞ったり，無視をしたりすることもあるだろう。これは，図 1–2 の子どもの防衛的方略とその破綻にあたるプロセスを導くことになる。

大橋は，特に愛着発達上の問題を抱えた病理的投影性同一化を行う者とのかかわりにおいて，このコンテイナーの抱える力，特に，夢想を維持することを援助することが介入ポイントとして重要であると示した。これは，投影性同一化理論からすると，心的苦痛への敏感性が弱い，あるいは低下した母親対象とは，何らかの理由で子どもが投げかけてくるβ要素に耐えることができず，その

受け取りを拒否したり，受け取ったとしても夢想を維持できず，処理することのできなかったりする群であると考えられるためである。

また，この夢想は，図3で言うところの前頭前皮質での内省的プロセスと重複するものと考えられる。つまり，養育者の「敏感な応答」が子どもの前頭前皮質でのプロセスを育むのである。

養育者の要因

では，このようにβ要素に耐えることができなかったり夢想が維持できなかったりするという状態は，何故生じるのだろうか。これには2つのパターンがある。一つは，そもそも母親対象が，抱え，β要素を処理する機能（コンテイニング機能）が未成熟であるという心理学的構造の不全の問題を有している場合と，もう一つは，何らかのストレス状況下にあって，内在化されているはずのコンテイニング機能を使えないという場合がある。特に後者については，図1–1のトラウマの部分や図1–2で示されたトラウマを抱えたコミュニティとしての視点，加えて，図3の二重覚醒システムの考え方が重要になるのではないかと考える。つまり，あまりにも強いストレス，あるいは慢性的なストレス状況，治療されない外傷体験などを抱えた養育者はスイッチが起きやすくなり，容易に闘争逃走反応，すなわち後頭葉・皮質下領域の活性化による自動的な無思考状態に陥りやすく，図2–2に示した低い敏感性や敏感性の欠如を引き起こしやすいと説明できる。

結論

ここまで工藤（2020）のアタッチメント相互作用図を基盤に，愛着上の課題を抱える子どもの変化成長プロセスを縦断的に評価し得るチェックリストの作成の基盤となる理論の探索を行った。ここで示した理論は，現場の中で子どもたちの愛着スタイルや問題行動を理解する上で有用だと筆者が感じている理論ではあるが，今後これらの理論の相互作用性をより詳細に議論し，包括的な理論体系を基盤とした現場で有用なチェックリストを開発する基盤を作っていきたい。

謝辞

本研究は科研費（19K03261）の助成と，2020年度聖学院大学総合研究所研究助成金を受けたものである。また，東北福祉大学の柴田理瑛先生には，本論執筆に際し貴重なご助言をいただいたことについて，ここに感謝を申し上げたい。

Reference

足立智昭（2020）震災を生きる：トラウマやPTSDとともに地域で生きるために．川島大輔他編．多様な人生のかたちに迫る発達心理学．ナカニシヤ出版.

足立智昭・大橋良枝・柴田理瑛・平野幹雄（2021）東日本大震災の長期的影響としての子どもの攻撃

性に対する介入プログラムの構築．宮城学院女子大学発達科学研究（21），31–38.

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, D., & Wall, S. (1978) *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation*. Erlbaum.

Bion, W. R. (1957) Differentiation of the psychotic from the non-psychotic personalities. *International Journal of Psychoanalysis*, 38, 266–275.

Bion, W. R. (1970). *Attention and Interpretation*. Tavistock.

Bowlby, J. (1970) *Child care and the growth of love*. Pelican, p. 12.

Fonagy, P., Gergely, G., Jurist, E. and Target, M. (2002) *Affect Regulation, Mentalization and the Development of the Self*. Other Press, New York.

Fonagy, P., Luyten, P., Bateman, A., Gergely, G., Strathearn, M., Target, M. and Allison, E. (2010) Attachment and Personality Pathology. In *Psychodynamic Psychotherapy for Personality Disorder: A Clinical Handbook*. Clarkin, J. F., Fonagy, P., and Gabbard, G. O. (Ed.), American Psychiatric Publishing, Inc.

Hesse, E., and Main, M. (1999) Second-generation effects of unresolved trauma in nonmaltreating parents: Dissociated, frightened, and threatening parental behavior. *Psychoanalytic Inquiry*, 19(4), 481–540.

本間博彰（2014）災害と子どもの心：経過に伴う変化　五十嵐隆（研究代表）子どものメンタルヘルスリスク軽減のための災害マネージメント（平成 26 年度厚労科研補助金　地域医療基盤開発推進研究事業「被災後の子どものこころの支援に関する研究」）1–7.

van Ijzendoorn, M. H., Dijikstra, J., and Bus, A. G. (1995) Attachment, Intelligence, and Language: A Meta-analysis. *Social Development, 4*(2), 115–128.

van Ijzendoorn, M. H., Schuengel, C. and Bakermans-Kranenburg, M. J. (1999) Disorganized attachment in early childhood: meta-analysis of precursors, concomitants, and sequelae. *Developmental Psychopathology*, 11(2), 225–49.

Karen, R (1994) *Becoming attached: Unfolding the mystery of the infant-mother bond and its impact on later life*. Grand Center Publishing.

小林芳文（2006）ムーブメント教育･療法による発達支援ステップガイド：MEPA-R 実践プログラム．日本文化科学社.

工藤晋平（2020）支援のための臨床的アタッチメント論：「安心感のケア」に向けて．ミネルヴァ書房.

Nelson, C. A., Zeanah, C. H., Fox, N. A., Marshall, P. J., Smke, A. T., and Guthrie, D. (2007) Cognitive recovery in Socially deprived young children. The Bucharest Early Intervention Project. *Science*, 318 (5858), 1937–1940.

大橋良枝（2017）知的特別支援学校の混乱に対する臨床介入モデルの精神分析的検討（1）：愛着障害児の投影性同一化と教師の孤立．聖学院大学論叢 **30**（1），65–81.

大橋良枝（2019）愛着障害児とのつきあい方：特別支援学校教員チームとの実践．金剛出版.

柴田理瑛・平野幹雄・西浦和樹・足立智昭（2019）東日本大震災の長期的影響と今求められる支援者支援：一般社団法人東日本大震災子ども・若者支援センター　2018 年度活動報告　宮城学院女子大学発達科学研究，8–16.

柴田理瑛・平野幹雄・足立智昭（2020）東日本大震災後の被災地における子どもの心身状態に関する研究　公益財団法人マツダ財団青少年健全育成関係　研究報告書（32）．（https://mzaidan.mazda.co.jp/publication/human_serach_rep/vol.32%202020/3%20shibata.pdf）

Fonagy P., Gergely, G., Jurist, E., & Target, M. 2002 Affect regulation, mentalization, and the development of the self. Other Press.

八木淳子（2021）子どものこころのケア外観．前田正治・松本和紀・八木淳子（編）東日本大震災とこころのケア：被災地支援 10 年の軌跡．日本評論社.

Indirect impact of the Great East Japan Earthquake on children's mental health: Development of an assessment tool for childcare settings.

Yoshie OHASHI

Abstract

Ten years have elapsed since the Great East Japan Earthquake struck, but the mental health issues that need to be addressed have not ceased to pile up. In particular, an increasing number of children have been experiencing restlessness and aggression, especially who have not directly experienced the disaster in the severely affected coastal areas. Therefore, assessment tools that apture the interaction of the factors of "environment holding trauma," "developmental characteristics," and "attachment" must be urgently developed. In this study, I attended to the attachment part in particular and examined a theoretical structure based on the attachment interaction process (Kudo, 2020) for the development of an assessment tool. This tool can be of assistance in childcare settings in areas affected by disasters where there is a marked sense of difficulty in relating to restless and aggressive infants.

Key words: the Great East Japan Earthquake, attachment issues, assessment tool, attachment interaction process